

# 地図と印刷

## ～近世日本における印刷と地図づくりの変遷～

凸版印刷株式会社 印刷博物館

### 1. 印刷博物館の活動紹介

#### (1) 印刷博物館とは

印刷博物館は凸版印刷株式会社が運営する企業博物館である。創立100周年を記念して2000年10月に設立された。企業博物館ではあるが、広く一般の方々に向けて印刷の歴史や文化、社会的な役割、技術などを紹介している。

開館20周年を機に展示室を中心に大幅な改変を行い、2020年10月にリニューアルオープンした。展示室における常設展は、以前は5つのテーマに基づいた古今東西の印刷をご紹介してきたが、印刷の歴史の流れを知りたいなどの声を多くいただいており、20年の活動を通じて蓄積してきた成果とあわせて展示に反映した。

新しい常設展は、大きく3つのゾーン「印刷の日本史」、「印刷の世界史<sup>パイ</sup>」、「印刷×技術」から構成される。

「印刷の日本史」(写真1)は、わが国の印刷のはじまりから現代に至るまで約1200年におよぶ長いあゆみを4つの時代区分(古代・中世、近世、近代、現代)に基づいて紹介しており、常設展のメインテーマとなっている。

「印刷の世界史」(写真2)は洋の東西を問わず、世界での印刷の広がりや発展を、歴史的・社会的事象とひもづけて紹介しており、視覚的に体感しながら、年表形式でたどることができる。「印刷×技術」(写真3)では、日本史・世界史の時系列に沿った紹介とは異なり、技術に特化している。印刷の基本要素を紹介するとともに、さまざまな製版方法を比較対照することで、印刷表現の違いが明確になるようにした。

展示方法としては、「印刷の日本史」、「印刷×技術」では、壁面においてグラフィックや年表、映



写真1 印刷の日本史



写真2 印刷の世界史



写真3 印刷×技術

像を用いて、資料に関しての時代的背景や技術的な側面の理解が進むように紹介している。資料についての解説は、展示<sup>じょうし</sup> 器に設置したタブレットに納めており、日本語以外にも英語、中国語、韓国語に対応している。展示室では年に一度、常設展を半分のスペースに縮小し、日々の活動による印刷文化の研究の成果として企画展を開催している。

また、展示室には「印刷工房」(写真4)がある。印刷工房は活版印刷の保存、継承、研究を行う施設である。長きにわたって文字印刷の主流であった活版という技術をインストラクターが日々技術の習得に励み、研究を行うことで技術の継承を目指している。その成果を展示やワークショップを通じて発信することで、活版印刷の普及につなげている。

印刷工房では「欧文書体アーカイブ」(写真5)の展示も行っている。これは印刷工房が所蔵する欧文活字書体を調査・研究した成果をコンテンツとして紹介したものである。今後も調査・研究を進めデータベースを更新しながら、イベントでの活用などを検討していく予定だ。

この他に印刷博物館の施設には、現代の印刷表現を中心に理解を深めていただく「P&Pギャラリー」、印刷とその関連分野を中心とした資料を約7万冊収蔵し、閲覧やレファレンス対応を行う「ライブラリー」がある。「P&Pギャラリー」は、「世界で最も美しい本コンクール」の入選図書や

各国の優れたデザインや装丁のコンクール受賞作品を紹介する「世界のブックデザイン」、現代のパッケージデザインや機能の進化を紹介した「現代日本のパッケージ」などの企画展やイベントを開催している。

## (2) 印刷文化学とは

開館20周年のリニューアルで、印刷博物館では人類と印刷メディアの関係を文化文明史的な視点から捉えなおし、社会や人びととの営みを考える「印刷文化学」の構築を目指すこととなった。「印刷文化学」の可視化に向けて、「深める」「伝える」「つながる」の3つの関わりで分類する。その個々の活動が連環することで、より成熟したものとするべく、日々の館内外での研究活動に励むとともに産官学のみならずのご参加や意見を募り深耕を目指している。

その活動の一つとして、2021年からは年に一度、「印刷文化学会議」を開催している。第1回は「テキストと版画—印刷による知の循環」、第2回は「本から眺める印刷メディアとコンテンツの興亡」と題し、古今東西を問わず印刷活動の現場で生み出された知恵が、社会にどのように受け入れられてきたのかを考えてきた。

『日本印刷文化史』(講談社)には、印刷文化学の概要や今後の課題と展望が掲載されているので、ぜひ詳細をご確認いただけると幸いである。



写真4 印刷工房



写真5 欧文書体アーカイブ



## 2. 地図と印刷

### (1) はじめに

ここからは2022年に開催した企画展「地図と印刷」を踏まえて、近世日本における印刷と地図づくりの変遷とともに、当時の人びとがどのように日本や世界を認識してきたのかを紹介したい。

私たちが日々の生活を送るうえで欠かすことができない地図。地図は古来、人びとが自分のいる世界の地理情報を伝える表現技法のひとつとしてつくられ、より多くの人びとに伝えるため、印刷物となり社会を支えている。現在は印刷物に限らず、スマートフォンなどさまざまなメディアで展開され、コミュニケーションの幅が広がっている。

では、地図が人びとに印刷物として受け入れられてきたのはいつ頃なのだろうか。日本では近世に地図が印刷物となって登場する。近世の日本で

は戦いのない平和な時代を通じて木版印刷技術が成熟し、独自の発展を遂げた。世界図、日本図、都市図など多様な地図がつくられ、印刷物として流布していくに従い、時代に応じた世界像が形成されていった。

### (2) 日本の印刷地図のはじまり

日本で印刷された地図のはじまりは、慶長期(1596～1615年)に登場した『拾芥抄』(写真6)に所収された地図である。『拾芥抄』は中世の百科事典のようなものである。印刷史の視点から見ると、16世紀末から17世紀中ごろに活字を用いて印刷・出版が行われ(古活字版)、そのような時代に刊行された。『拾芥抄』の本文は木活字で印刷され、地図などの図版が木版で刷られた。日本では京都で木版印刷による民間での印刷・出版がはじまるが、地図の印刷も同様にスタートす



写真6 『拾芥抄』に所収された日本図

※写真は寛永版より合成

る。最初は「行基図」という中世以来の世界観をもった日本図が描かれ、『拾芥抄』ではこれが所収された。「行基図」は、五畿七道という古代律令制での行政区分の国々を団子のような曲線で囲み集めて、道の線でつなぎ、山城国（京都）を起点に諸国への経路を記したものである。室町時代から続く文化や知的な情報を欲しがることがあり、印刷・出版に携わる人物がそのニーズを感じ取って、印刷・出版をしたと思われる。この「行基図」は詳しい地図がつくられると次第に姿を消したが、江戸後期には工芸品に絵柄となって登場した。

また江戸時代の初期にあたる寛永期（1624～1644年）は、一枚の板を彫って印刷を行う整版による木版印刷が次第に増え、京都で民間の印刷・出版が萌芽した時期にあたるが、この頃に京都の都市図「都記」などの印刷された都市図も誕生した。日本では近世初期の木版印刷による民間での印刷・出版のはじまりと同様に、地図の印刷もスタートしたのである。

### （3）文治の展開と浮世

江戸幕府は幕府の強権により統制する武断政治を行っていたが、3代将軍・徳川家光が亡くなり次第に武断政治が行き詰まる。4代将軍・徳川家綱以降、幕府は文治政治への転換を進め、5代将軍・徳川綱吉により文治政治が強化された。そして都市町人の台頭で経済活動が活発になり、社会が成熟・安定してくると文芸・学問も発展した。いわゆる元禄文化である。文化の受け手となる層が広がり、印刷・出版文化を支えることとなった。

地図づくりにおいては、17世紀末から18世紀初頭に浮世絵師・石川流宣<sup>ともふ</sup>が登場し、日本図や世界図、都市図などを精力的に手掛け木版印刷で刊行した。日本図としては「本朝図鑑綱目」やそれを改訂した「日本海山潮陸図」<sup>にほんかいさんちょうりくず</sup>、江戸の都市図の「江戸図鑑綱目」、世界図「万国総界図」などをつくりだしている。

「日本海山潮陸図」は、1691（元禄4）年に江戸の版元・相模屋太兵衛から刊行された。日本がデフォルメされた形になっているが、浮世絵師な

らではの力量を発揮し、絵画的な表現と色彩の豊かさを生かしている。見るのも楽しい「絵図」といえる。一方で都市、寺社、名所などの地誌情報とともに、江戸時代の大名家の人名録『武鑑』の要素を加え大名の氏名や石高などを示したりと、実用的な情報が多く盛り込まれ、幅広く活用された。また、描かれている情報を東西で比較すると東側の方がより詳細になっている。流宣は江戸の浮世絵師であり、版元が江戸の相模屋というタグであること、経済が発展して江戸が都市として成長したことにより、江戸市中の文化の受け手となる需要層が拡大し、その人びとをターゲットとして想定したことが考えられる。流宣が手掛けた日本図は人気を博し、「流宣図」<sup>りゅうせんず</sup>として1世紀近くにわたって人びとに親しまれ続け、元禄という浮世を代表する絵図（地図）となり、「絵図」が大衆化していった。

### （4）地誌の探究と広がる世界

文治政治の展開は、学問を重視することにもなり、歴史学や地図づくりにおいても実証的な考え方が進展した。地図づくりでは中国的な地理学の考え方に影響を受けながらも、正しさを探究しようとする動きが知識人を中心に現れ、考証された地図づくりや地誌編さんが行われた。正しい日本の地図の姿を追求めたのが、長久保赤水<sup>ながくぼせきすい</sup>だ。

赤水は水戸藩・高萩の地理学者で、日本図「改正日本輿地路程全図」<sup>かいせい にほん よち ろうていぜんず</sup>（写真7）を1779（安永8）年に大坂の版元・浅野弥兵衛から刊行した。国内で刊行された日本図では初めて経緯線が示されており、地誌情報がかなり豊富である。赤水は20年以上の歳月をかけ、自身の経験とさまざまな地図や地誌などの書物を通じて日本の各地の情報を収集し、校訂・編集して日本図を作り上げた。また、赤水は正しさを追求し、刊行して終わることに満足はせず、正しい情報を知ると改定を加え、より正しく、詳細な地図になることを目指した。正しさを探究するという強い意志が地図に表れている。

赤水が手掛けた日本図は「赤水図」と呼ばれ、絵図としての「流宣図」にとってかわり、スタン



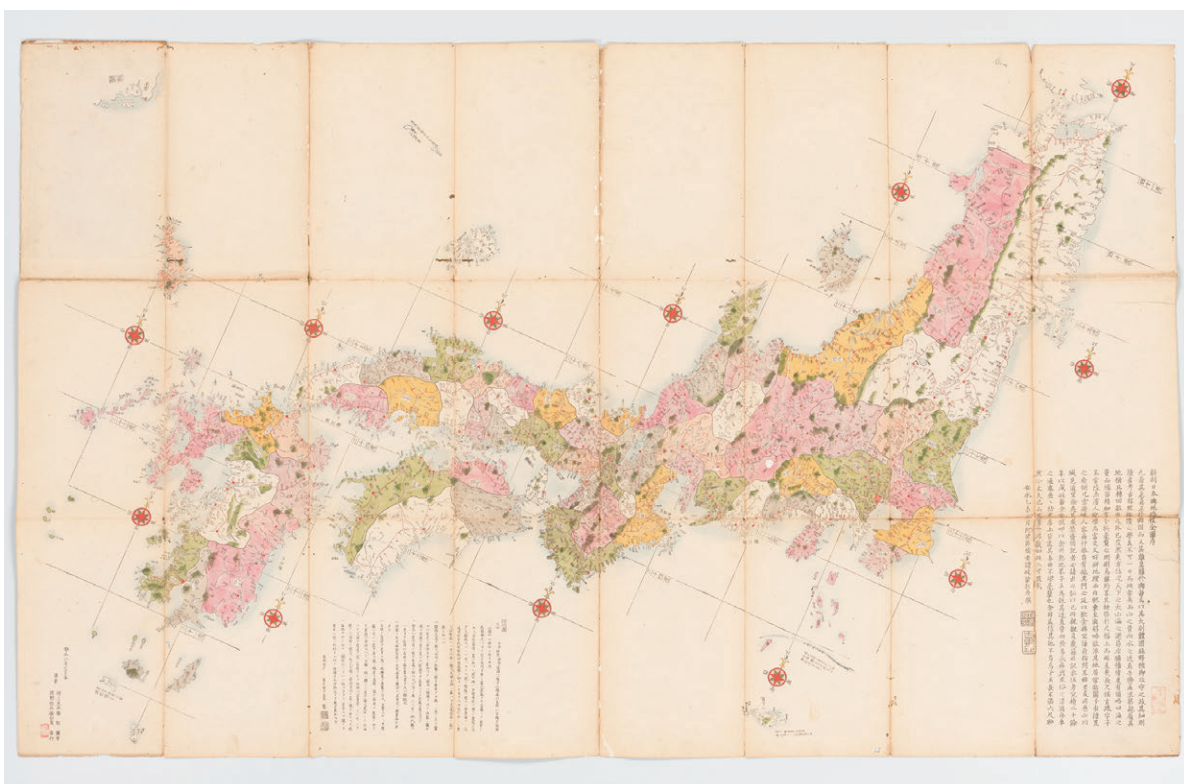


写真7 「改正日本輿地路程全図」

ダードとなった。その後日本国内では「赤水図」を参考にしてさまざまな地図がつくられるだけでなく、シーボルト『日本』に所収された地図に代表されるように、西洋でも貴重な日本の参考資料となっている。「赤水図」は近世後期から明治に至るまで、日本人にとっての「日本」のイメージとして用いられた。伊能忠敬が手掛けた日本図「伊能図」の登場より、半世紀程も前のことである。

8代将軍・徳川吉宗による漢訳洋書の輸入緩和は、蘭学の発展を促した。蘭学を志す者を中心に、蘭書から西洋の学問や技術、地理など実用的な情報を取り入れる機会が広がる。司馬江漢は、腐食銅版画（エッチング）の技術を、工夫を重ね独自に習得した。「地球全図」や「天球全図」に収録された「地球隋円図」(写真8)などを手掛け、印刷・出版というメディアの特長を生かしながら、西洋の文化を広め、人びとの世界に対する正確な理解を促そうとした。



写真8 「地球隋円図」

また、蘭学者のネットワークの中で、「地図と印刷」という点から代表的な人物をもう一人紹介したい。福知山藩主・朽木昌綱だ。昌綱は古銭のコレクターとしても有名で、本草学・博物学に基づく、正しい万物の情報を突き詰める姿勢に依拠して、『西洋錢譜』など古銭に関する書を多く著している。またオランダ商館長ともオランダ語で文通をしており、当代随一の蘭学者ともいえる。その昌綱は『泰西輿地図説』(写真9)を著した。日本人により最初に刊行された本格的なヨーロッパの地誌書である。ドイツ人ヒュブネル原著『古今地理学問答』の蘭訳本である、地理書『ゼオガラヒ』を元オランダ通詞の荒井庄十郎らの協力を得て抄訳された。ヨーロッパの総論やポルトガルやフランスなどの西洋の国の地理や風土、由来などを漢字と片仮名の混じった文章で述べている。6冊のうちの1冊は図版集になっており、世界全図やヨーロッパの国別図、パリやロンドンなどの都市図、各国の紋章を扱い、木版で印刷された。当時の海外知識の源泉となる本であった。今までは遠い存在であったヨーロッパの学問や地理知識

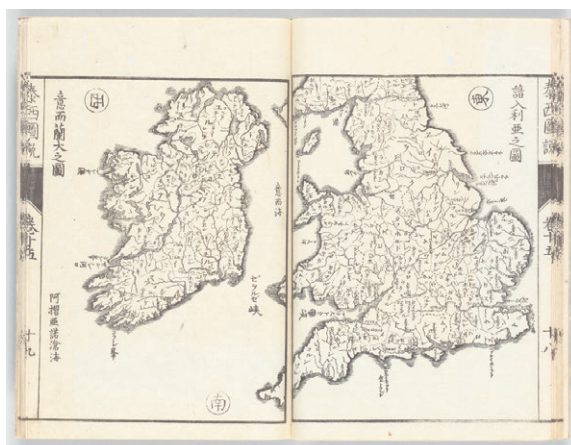


写真9 『泰西輿地図説』

を吸収していくことで、それまでの中国を中心とした世界からさらに広い世界へと目が向けられ、世界の認識が広がっていったのである。

## (5)「海国」日本と世界との接近

地図を見ると、日本は四方を海に囲まれた島国であることがわかる。この点に着目して、当時の

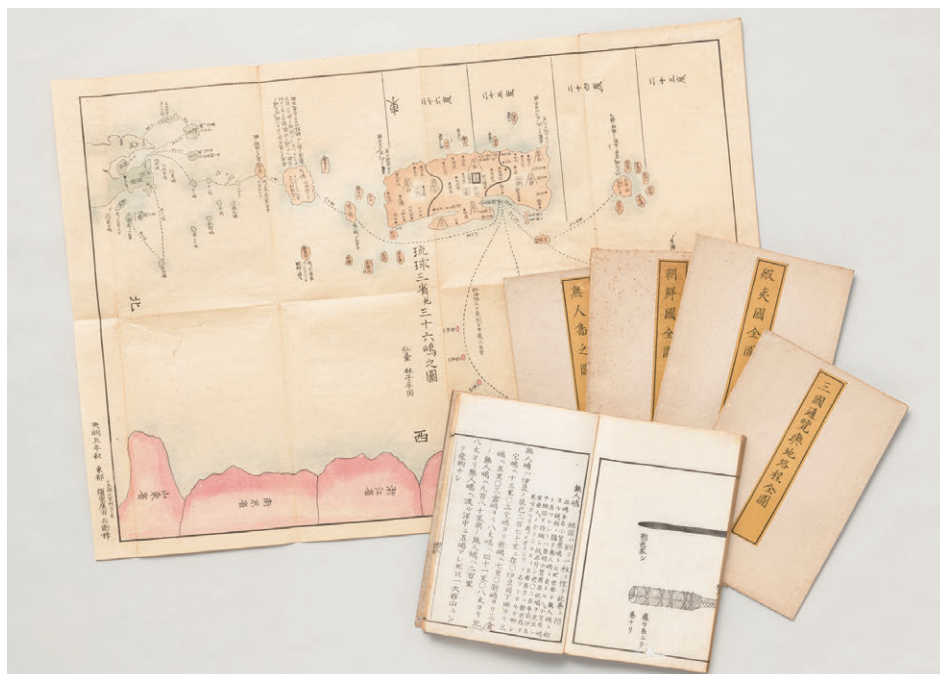


写真10 『三國通覧図説』



世界情勢を敏感に感じ取り、日本の海防の必要性を、印刷・出版により広めようとした人物がいる。林子平である。子平は『三国通覧図説』(写真10)を大手版元の一角・須原屋市兵衛から、また『海国兵談』を自費出版し、海防の普及を目指した。この日本の海防と世界の接近という事象が、子平と老中・松平定信を中心とした中で、印刷とも密接に関係することになる。

子平は、国防的な観点から日本の周辺地理を解説し、日本が四方を海に囲まれた「海国」とした。西洋列強が東アジアへ進出を強めていることに目を向けさせ、当時の日本に海防がまだ整っていなかったことから、印刷・出版のメディアとしてのパワーを生かし、海防を普及させようとしていた。しかしながら、時は老中・松平定信による寛政の改革下、出版取り締まりが強化されていた時であった。市中を混乱に陥れてしまうと幕府に捉えられ、両書とも絶版扱いとなってしまった。しかし、ロシアの南下政策が進み、西洋列強も日本と接触を試みるなど、子平の語っていた海防の必要性が現実となり、海防意識が高まった。定信自

身も海防には強い関心を抱き、異国船の到来を忘れないことが海防意識の高まりへとつながることを伝える「異国船図」を手掛けた。また西洋の地理情報や学問にも目を向けており、<sup>あ お う どう で ん ぜん</sup>亜欧堂田善をとりたて、田善には銅版画の習得をさせた。田善は幕府の世界地図「新訂万国全図」を手掛けている。

日本近海に異国船が現れ始め西洋との接近が進むと幕府内でも対策を考える必要性に迫られた。幕府は鎖国体制を継続する一方で、情勢を敏感に感じ取り、より実務的で正確な西洋の情報を取り入れようとした。天文方を中心に、最先端の地理情報<sup>か げ</sup>を得ようとする動きがでてくる。天文方の高橋景保<sup>やす</sup>は幕府の命を受けて、1810(文化7)年に世界地図「新訂万国全図」(写真11)の製作にとりかかり、銅版印刷で刊行した。アロースミスの世界図を土台にしつつも、間宮林蔵による樺太調査の結果を採用し、間宮海峡を反映して樺太を島としたりと、当時の最新情報を反映しており、国内外問わず最も優れた世界図となっている。その銅版印刷を手掛けたのが田善である。地図と印刷を通してみると、松平定信の周辺で地図と外交の関わりが深ま

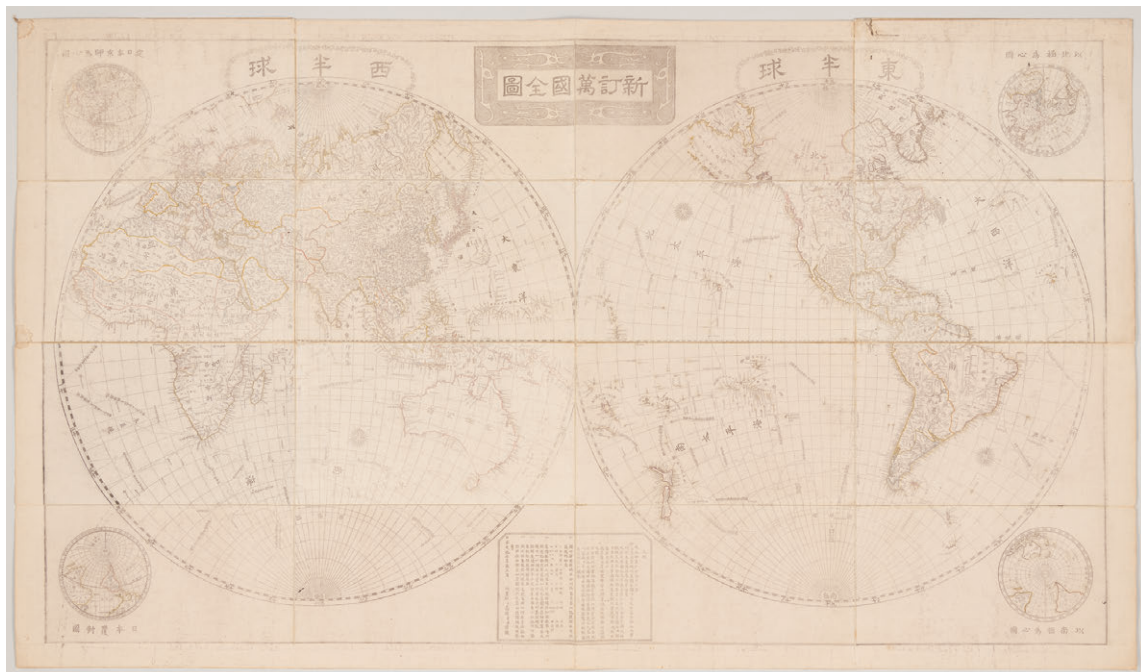


写真11 「新訂万国全図」

る中で、地図づくりが動いていくこととなった。

## (6) 伊能図の衝撃と幕末の激動

日本人で地図という思い浮かべるのがおそらく伊能忠敬であろう。伊能忠敬は、日本で初めての実測地図「大日本沿海輿地全図」、通称「伊能図」をまとめた人物として有名である。その正確さは



写真12 「官板実測日本地図」より「畿内東海東北陸」



写真13 「官板実測日本地図」より「蝦夷諸島」

今までのものとは一線を画しており、秘匿情報とされ、シーボルトによる国外への持ち出しが発覚したシーボルト事件なども引き起こした。伊能図は近代に引き継がれ礎となり、地図づくりに活用され続けていった。

忠敬は隠居後に景保の父・<sup>よしとき</sup>至時に師事し、天文や暦学、測量を学んだ。忠敬は地球のサイズを知りたいという思いがあり、至時も思いを同じくしていた。幕府もロシアの南下政策を意識する中で、海防に向けた正確な地図を必要としており、蝦夷地測量の許可を与えた。その測量結果が認められ、幕府の公式の測量にもなり、生涯で10回におよぶ日本全国の測量が行われ、忠敬の死後、伊能図が完成した。

今までは五畿七道という古代律令制での行政区分に基づいて日本という国が考えられていた。しかし、忠敬による測量で実測の海岸線が結ばれていくと、私たちにもなじみのある明確な日本の形状が浮かびあがり、開国以降は海国日本の境界線の意識の芽生えを促すきっかけになった。

伊能図は完成後約半世紀がたつと印刷物となる。伊能図は大図・中図・小図があり、小図を元にした「官板実測日本地図」(写真12)は日本で初めて刊行された実測日本地図である。幕府が洋学研究や教育のために設置した開成所から慶応期(1865~1867年)に官板として木版印刷による三色摺で刊行されている。1867年に開催された第2回パリ万国博覧会には5部出品された。「伊能図」の特徴ともいえる、測量された海岸線地域や街道地域などが詳細に描かれ、測量がされていない地域は空白となっている。地図に記された地名などの表記は細かく、彫師の技術力の高さがうかがえる。「官板実測日本地図」の「蝦夷諸島」(写真13)は内陸部まで詳細に描かれており、これは伊能図以外に松浦武四郎「<sup>とうざい え ぞ さん せん ち り と り</sup>東西蝦夷山川地理取調 図」が参考にとされたようである。

また、イギリスが日本近海を測量していた際、攘夷勢力による攻撃を懸念していた幕府を通じて、伊能図の写しがイギリスに伝わる。イギリスはその地図の正確さに驚き、測量の結果も反映さ



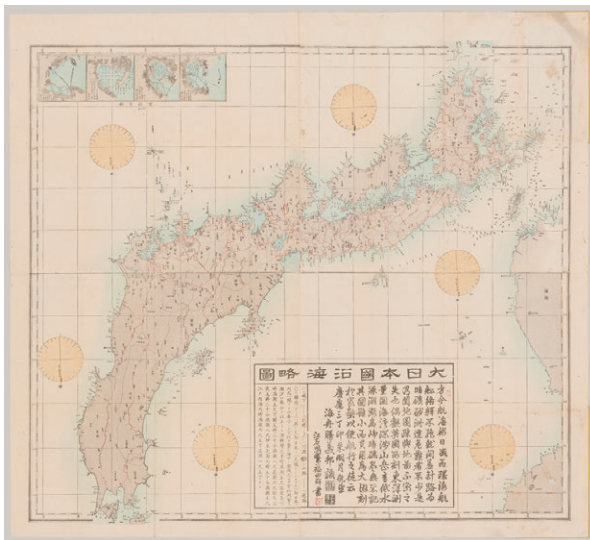


写真14 「大日本国沿海略図」



写真15 「新刊輿地全図」

れ、1863年にイギリスで「日本と朝鮮近傍の沿海図」として刊行された。勝海舟がこの地図と巡り合い、海軍伝習所での必要教材として翻訳を命じ、木版印刷で「大日本国沿海略図」(写真14)を刊行した。逆輸入の形で日本に伊能図が印刷物として登場したのである。

開国を迎え、鎖国体制が終了すると、大きく変貌を遂げようと幕府や知識人が世界へと目を向け、洋学に目覚めていく。その関心を映し出すかのように詳細な世界地図が多く刊行され始めた。佐藤政養による「新刊輿地全図」(写真15)、箕作省吾の「新製輿地全図」などがある。開国のうねりを経て、子平が日本を「海国」と捉えた意識は、世界とのつながりが強まる中で知識人の間において如実に表れてきた。

明治時代になると、政府は西洋の技術や知識・制度を導入するだけでなく、お雇い外国人を登用し、技術習得を目指す。政府は国土を把握するため、地図づくりににおいても同様に西洋の技術習得に励み、測量による科学的でより正確な地図を製作していく。印刷・出版では、近世を通じて時間をかけて整版による木版印刷が成熟し、近代印刷産業の下地が築かれた。明治時代になってからは、木版に代わり、銅版や石版印刷を活用して、政府と民間でさまざまな地図がつくられていく。

### 3. おわりに

本稿では企画展「地図と印刷」の内容にもとづいて、地図と印刷の関わりをみてきた。そこには、印刷・出版の文化的な流れに沿うかのように、印刷された地図が登場する。本稿で取り上げた地図以外にも多種多様な地図が印刷物となって生み出されている。近世に入り、民間での印刷・出版がこころりゅう興隆する中で、印刷が人びとのニーズに応え、地図づくりの発展を支えていた。そして、石川流宣による「流宣図」、長久保赤水の「赤水図」、伊能忠敬の「伊能図」という、近世を通じて3つの代表的な日本図が登場し、印刷・出版されることで当時の人びとに広まっていった。それらの地図には日本人の地理的な感覚や景観意識をうかがうことができる。地図の印刷・出版によって、日本人が「日本」や「世界」という形状をイメージし共有することを、下支えしたといえるのではないであろうか。

また近代の印刷された地図を見ると、印刷製版技術の変化に加えて、測量技術が変化したことは、近世までの「地図と印刷」の関係性と大きく様相が異なる。近代の印刷と地図のあゆみは、ひとつの大きなテーマになるので、今後改めて考えることとしたい。